柳橋の歴史

柳橋　町の歴史

柳橋という町の名は、江戸中期の頃から花街として人によく知られ、橋のほとりには船宿が数多く並び大変な賑わいだったようです。幕末・明治以降も花柳界として名高く、夏には両国橋を中心に大川で花火が打ち上げられていました。

春の夜や　女見返る　柳橋

――正岡子規によるこの句を始め、柳橋は文人たちに度々とりあげられ、山本周五郎、池波正太郎、藤沢周平などの時代小説を初め、映画やドラマの舞台にもなり、江戸の雰囲気を感じられる数少ない町として、今も人々に親しまれています。

柳橋　名前の由来

一、矢の倉橋が矢之城（やのき）橋になり、さらに柳橋になる。
二、柳原堤の末にあったことに由来する。
三、橋のたもとに柳の木があったことに由来する。

橋のたもとにある、柳橋についての石碑

「柳橋」が初めて架けられたのは、元禄11年（1698）。神田川が隅田川にそそぐところにあったことから、その当時は「川口出口之橋（かわぐちでぐちのばし）」と呼ばれていました。それがいつしか柳橋と呼ばれるようになったのですが、その由来には諸説あり真説は不明ですが、右に挙げた3つが有力な説となっています。

現在の橋は昭和4年に架けられたもので、ドイツ・ライン川の橋を基にした永代橋のデザインを取り入れているそうです。欄干には花柳界の街にちなみ、芸者衆をイメージしたかんざしのレリーフが施されており、当時の名残を留めています。

完成から80余年、現在では復興橋梁も少なくなり、貴重な近代の土木遺産として平成3年に整備され、同11年に中央区民有形文化財に登録されています。

柳橋の欄干を飾る、かんざしのレリーフ

昭和36年当時の柳橋周辺。

写真所蔵／小松屋